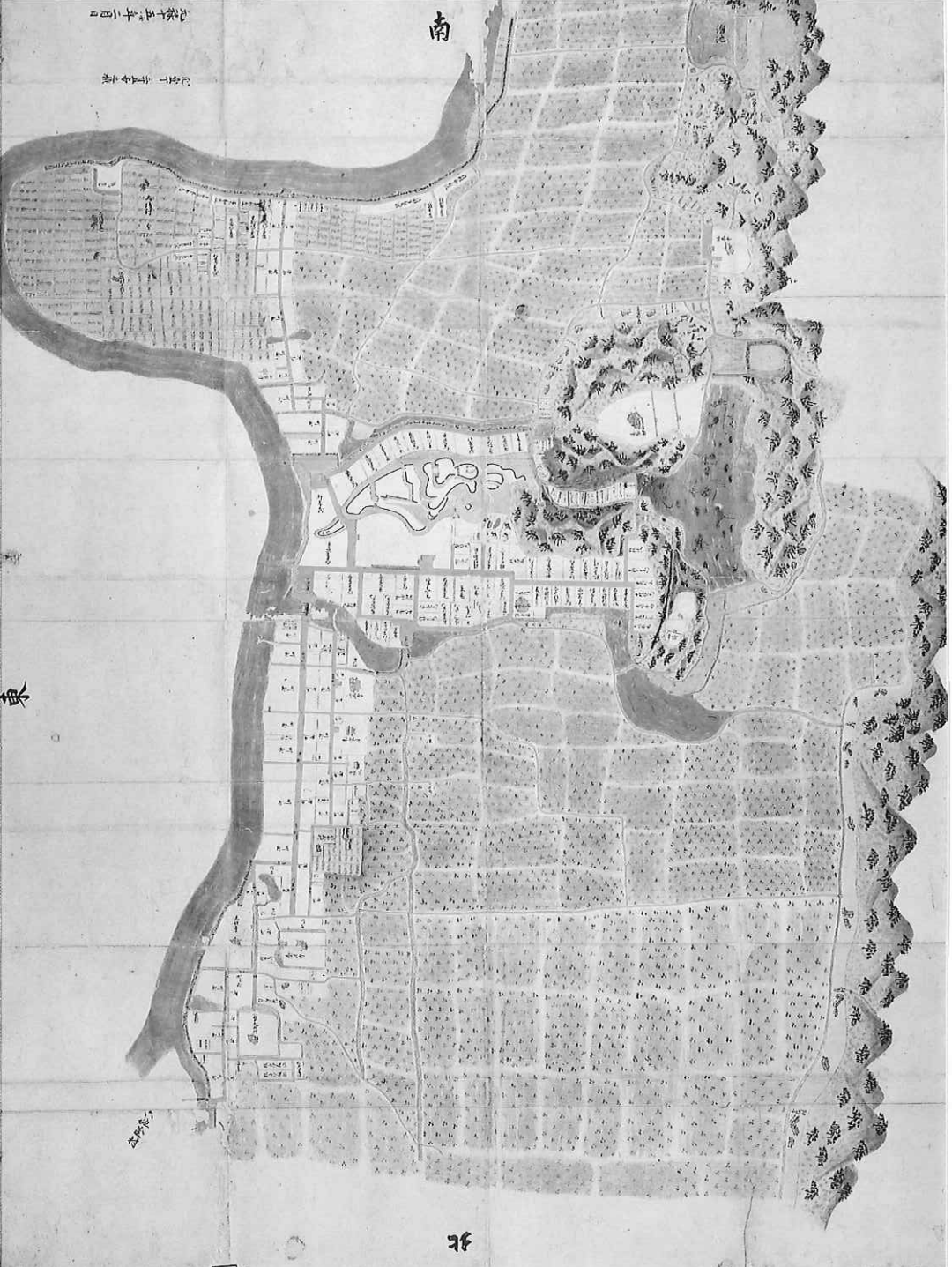


豊岡市史

上
卷

南

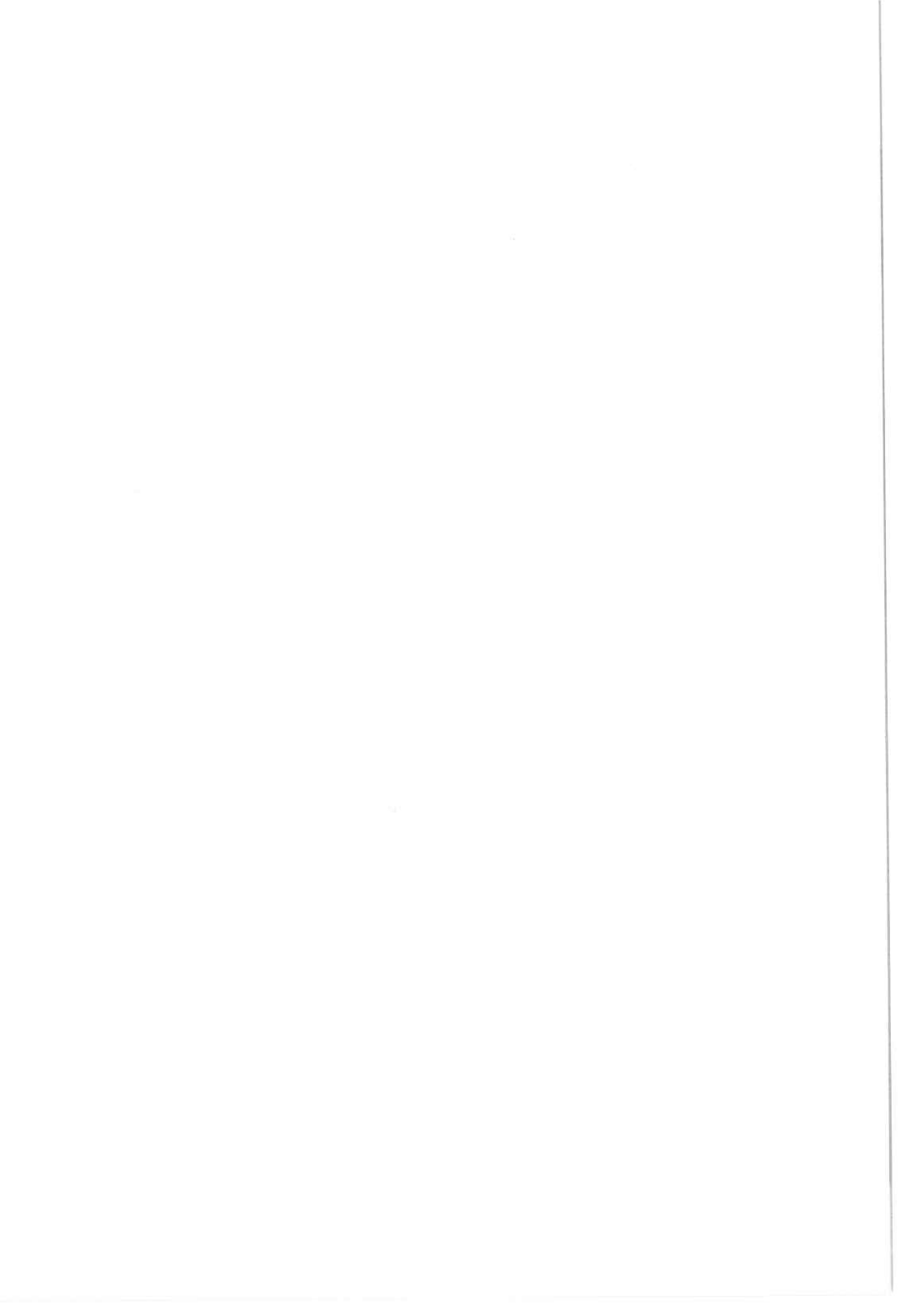
豊岡城下



東

36

元禄15年 豊岡城下絵図





1号鐃 高45.5cm



2号鐃 高45cm

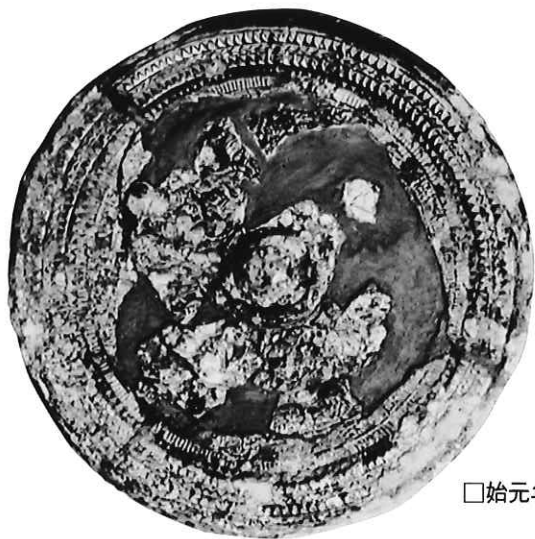


3号鐃 高44cm



4号鐃 高46cm

氣比地区出土銅鐃 国指定重要文化財



□始元年鏡 森尾古墳出土



土馬 森尾古墳付近出土



文常寺聖觀音立像
国指定重要文化財



妙楽寺地区見手山出土錫杖頭と宝珠杵
豊岡市指定文化財



持国天 高133.6cm



増長天 高133.4cm

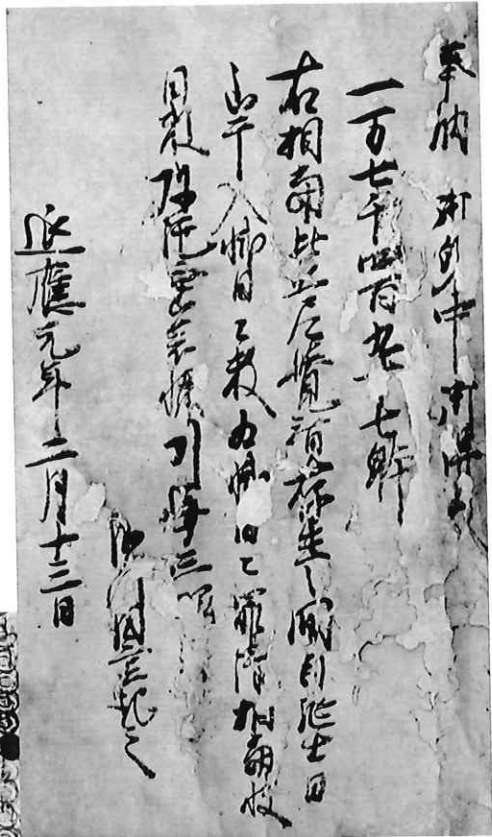


広目天 高134.3cm



多聞天 高135.0cm

東楽寺四天王立像 国指定重要文化財



奉納 延應元年二月十三日

一千七百四十九七軒

右相南無阿弥陀仏念誦生一願自誕生

山平八幡日之末由願口之罪障加納
 日數彌陀乘□□引導□□□□

延應元年二月十三日

奉納 御身中御佛□

一万七千四百九十七軒

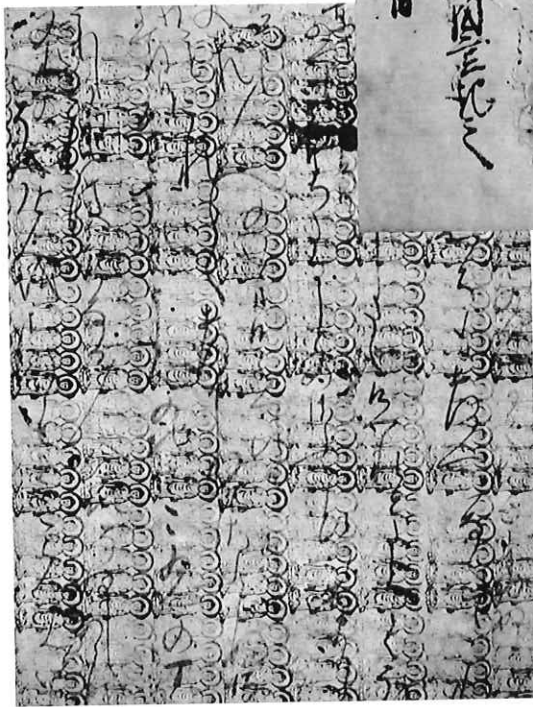
右相当比丘尼覺智存生之間自誕生日

至于入滅日々數為滅日々罪障相当狀

日數彌陀乘□□引導□□□□

沙門円空記之

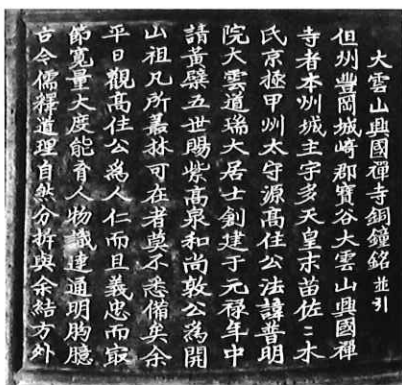
延應元年二月十三日



光行寺本尊胎内文書
 (上) 円空願文 (下) 摺り仏
 豊岡市指定文化財



京極高行公 絵像



元・興国寺の梵鐘

右はその銘文のうちの第1区目



高屋焼



骨柳問屋規定書

序

昭和二十五年四月一日に誕生した豊岡市は、今年度が市制施行三〇周年にあたります。

この三〇年の間に、豊岡市は市域のひろがりはもとより、政治的にも、経済的にも、また文化的にも、めざましい発展をとげ、兵庫県北部の中核都市としての機能を遺憾なく発揮し得ましたことはご同慶の至りであります。

このことは、もとより、地の利、時の運があり、これを支えるに人の和があったことに思いを致して、感激に堪えないところであります。

ここにおいて豊岡市の歴史をふりかえり、現状をふまえて未来を展望することは、市制三〇周年を迎えた今、まして「地方の時代」といわれる今日において、われわれ豊岡市民にとって大いに意義あることと信じます。このため、豊岡市史編集委員会に委嘱して発刊を進めたのが『豊岡市史』です。

豊岡市は、あめのひぼこ天日槍による開発伝承をはじめ、延喜式内の神々や古い仏たちの祭祀をうけつぎ、

室町時代の一時期は但馬守護・山名氏の拠点ともなり、江戸時代には杉原氏・京極氏の城下町となり、明治のはじめには豊岡県庁も置かれた由緒ある土地柄であります。われわれは、これら先人の深遠なる営みの上にこそ、豊岡市勢発展の基盤があることを想起すべきであります。

この『豊岡市史』編集の間に、前編集委員長・石田松藏氏を失ったことは、まことに痛恨事でありましたが、これ乗り越えて後任委員長・梅谷光信氏を中心に、短期間に、よく執筆・編集を終えて頂きました。これはまた、豊岡市内外で、資料ご提供の諸家をはじめ、多くのみなさんの絶大なるご協力が得られたおかげでもあります。

ここに、これら各位に対して、深甚なる謝意を表する次第であります。

幸いにして、この市史が多くくの市民各位に親しまれ、史実への新たな感銘と矜持を生み、郷土発展へのよすがとなることを切望するものであります。

昭和五十六年三月

豊岡市長

橋本省三

凡例

一、豊岡市史は上巻（幕末まで）と、下巻（明治以降）の二巻から成る予定であるが、この巻は、その上巻である。

一、本文の記述は、原則として当用漢字・現代かなづかいによった。ただし、歴史用語・学術用語・人名・地名などはこれによっていない。読みにくい漢字にはなるべく初出のところでふりがなをつけた。

一、数字の表わし方は、原則として次の例によった。

一〇軒・十五歳・三六匁・四万三五七〇人・数千両（基数）

十番目・天保十四年（一八四三）六月二十三日（序数）

一、引用した史料の出典・文献名は、原則として『』でかこみ、引用記述の末尾に明記するようにつとめた。

一、図版・写真・表は、それぞれ図1・写1・表1というように略記し、一連番号をつけた。

一、人名は原則として、敬称を省略した。

一、日本年号には、原則としてその下の（ ）内に西暦を付した。ただし、同一節内で頻出するばあいには、これを省略したものもある。

一、巻末には、江戸時代末までの『豊岡市史年表』と『図・表・写真一覧』を付した。

豊岡市史 上巻 目次

序編 豊岡市の自然環境

第一節 豊岡市の位置と面積……………	3
豊岡の地形 豊岡盆地 位置・面積・人口	
第二節 地形・地質の概観……………	5
日本の地質構造区分と豊岡 豊岡市域周辺の火山活動	
第三節 豊岡市域とその周辺の地質構成……………	8
豊岡の基盤 矢田川層群 山陰型花崗岩 北但層群 豊岡累層 照来層群	
玄武洞玄武岩 豊岡市域を走る断層	
第四節 豊岡市域とその周辺の地形……………	13
概観 海岸地域の地形 豊岡盆地 豊岡盆地の地下構造 豊岡盆地の微地形	
第五節 円山川の旧河道……………	27
中筋地区の旧河道 大保恵堤と旧河道 清冷寺・八社宮・伏付近の蛇行跡と郡境	
旧・気多郡界と旧河道 円山川西岸の旧河道 六地藏地区の旧河道	
旧・田鶴野村の旧河道 奈佐谷の旧河道	
第六節 豊岡地方の気象……………	35

第一編 古代・中世

第一章 考古学から見た豊岡

第一節 狩りと採集の時代

遺跡と開発 前史時代 赤土のなかの石器 寒い列島 県下の先土器時代

但馬の先土器時代 弓の発明 土の器 最古の土器 土器の変遷 但馬の縄文遺跡

市内の縄文遺跡 大昔のゴミ捨て場・中谷貝塚 川のなかの土器 植物性食料と石器

縄文人の生活 縄文人の交流 縄文時代の終末

第二節 米作りと金属器の時代

米の文化 籾痕のある土器片 石包丁

第三節 弥生人の生活

銅鐸の発見 隠された銅鐸 運ばれた銅鐸 銅鐸の絵 破碎された銅鐸

運ばれた土器 石斧の素材 石器から鉄製利器へ 円形の住居 円形の墓

第四節 古墳を造った時代

古墳時代 丘の上の集団墓 最古の首長墓 水運の要所に造られた古墳

同じ型の銅鏡 古墳と土器棺 大型古墳の出現 群集する小規模古墳

納屋ホーキ古墳群 日本製の鏡を出した古墳 石棺を直葬した古墳群

木棺を直葬した古墳

第五節 後期古墳の時代

横穴式石室の登場 古墳の変質 海岸の大型石室墳 後期の首長墓

横穴古墳と古墳の終末 土葬から火葬へ 地方寺院の成立

第二章 古代の豊岡

第一節 城崎郡の開発

但馬の国と有力氏族 但馬の重要遺跡と古墳 城崎という名称 城崎郡の行政機関

城崎郡の郡域

第二節 城崎郡衙

城崎郡城崎郷 城崎郡衙

第三節 城崎郡とヤマト政権

加古川水系と円山川水系 小島の海神社 二方部豊島 大生部と土師部

出石・屯倉と小田井県 脱走常習者 中男作物 湧旱の百姓

第四節 豊岡盆地の条里制

碁盤目状の田 条里制 条里制と市街地 各地域の条里制地割り 関連地名の残存

条里制地割りと古墳の分布

第五節 初期の仏教文化

葉琳庵寺 寿永寺と定額寺 古い仏像を祀る寺 寺名のつく地名 三坂寺と正法寺

寺地の移転 経塚と経筒

第六節 式内社と国史見在社

官社の指定 式内社 名神大社 国史見在社 重浪神社の磐座 兵主神社

清水水八幡宮 天日槍伝承 八幡宮別宮と但馬国司

第三章 鎌倉時代の豊岡

第一節 寿永の内乱

「きの崎」という大庄 妙楽寺の頼朝・義経書状 妙楽寺と朝倉高清

越中次郎兵衛盛継 平家落人と伊賀谷

第二節 雅成親王

雅成親王の配流地 長講堂領・城崎庄 雅成親王略譜 但馬の雅成親王

親王、京都へ移座 親王、再び配所へ 雅成親王の教養 伝説上の雅成親王

第三節 豊岡市域内の城崎郡の御家人

城崎郡の武士の盛衰 関東御家人の配置 国御家人 国御家人の配置

第四節 守護領と氣比庄

太田昌明 もう一つの太田氏 但馬水軍 氣比水上庄の争論

第五節 郷域の変遷と庄園

郷の変質 郷域の変遷 保と村 庄園の領主 庄民の負担

第四章 南北朝・室町時代の豊岡

215 205 197 185 172 163 163 152

次
第一節 南北朝の争乱……………215

建武中興と小田井社 氣比城の合戦 三開山と田結庄城 金剛寺の利生塔

山名時氏、三開山に入る 下鶴井庄 性法寺城・五箇庄城・奈佐城

三開山城下の攻防戦 山名、但馬守護となる

第二節 垣屋氏と豊岡……………229

垣屋系図 垣屋重教と亀ヶ崎城 山名時義と城崎 垣屋時忠と明徳の乱

山名持豊と九日市 垣屋氏と九日市城 戸牧山の合戦 山名持豊と播磨

木崎城の包囲戦 木崎城と室野 九日在所の政豊

第三節 畿内と中国の勢力のはびこり……………242

轟城主系の垣屋氏 奈佐日本之助 織田氏の合力作戦 芸但和陸 野田合戦

田結庄氏 山名氏の滅亡 水生山城の攻防 下津屋と篠部 三開山落城伝説

国衆とその配下

第五章 中世の農村と宗教……………256

第一節 中世の仏教……………256

中世の石造遺物 時宗の展開 真宗教団の成立 白紙の御影 各派の禪寺

五山派と大雲山祥雲寺 彦龍、古幡を訪う 大応派と豊岡の臨濟禪 永平寺系の曹洞宗

通幻派と豊岡の曹洞宗 日真と法華宗 折伏転宗

第二節 農村と神社……………272

第二編 近世

九日市場のにぎわい 津居山関 灘千軒 農業の発展 玉石新田
重要文化財の神社建築 山名氏と小田井社 山名氏と転出寺院

第一章 織豊政権の但馬進出と豊岡支配

第一節 但馬征伐と秀吉の統治策

中世的秩序の一掃と武断政策 但馬統治にあたった秀吉の家臣団

第二節 織豊政権下の歴代豊岡城主

歴代豊岡城主 宮部善祥房継潤 木下助兵衛尉 尾藤久右衛門知定 明石左近則実
福原右馬助直高

第三節 天下統一戦争に動員された豊岡勢

九州征伐と高城・根白坂の血戦 小田原北條征伐と但馬豊岡勢 朝鮮の役と但馬豊岡勢

第二章 豊岡城下町の形成と幕藩体制の成立

第一節 豊岡城下町の建設

宮部善祥房の治績 豊岡城下町の町並み

第二節 杉原氏の時代

杉原氏の出目 杉原長房 杉原重長と重玄 杉原氏の家臣

第三節 近世村落の成立と所領沿革

321

313

306

306

298

294

289

289

豊岡藩の知行石高の変動	豊岡市域の村々の所領沿革	旗本・倉見小出家
近世村落の成立と村切り		
第四節 検地と村別石高の変遷	近世の村の成立と検地	伊賀谷村田畠名寄帳
		村別石高の変遷
第五節 豊岡市域における新田開発	近世初頭の新田開発	新田開発の具体例
		豊岡藩領の新田開発の傾向
第三章 京極氏の入部と豊岡藩政の展開		
第一節 京極氏の系譜	京極氏の系譜	歴代藩主
	京極氏の系譜	歴代藩主
第二節 豊岡藩の武士団の編成	藩の体制	藩士の禄高
		武家奉公人
第三節 京極藩政を支えた人びと	石東家	舟木家
		由利家
		佐川家
第四節 大石りくと正福寺	大石りくとその子どもたち	大石りくの離縁状
		忠臣蔵と大石りく
		正福寺
第四章 農民のくらし		
第一節 村方のしくみ	百姓	村役人
		大庄屋
		五人組
		過重な年貢
		多種多様な小物成
		御普請と村普請

第二章	農業経営の発達……………	394
	鎌田村の農業経営のありさま	男のかせぎ・女のかせぎ
	猪・鹿・猿の出没と鉄砲の取締まり	農作物の種類
		肥料
第三節	農事暦、年中行事と抑圧された農民のくらし……………	399
	農事暦	年中行事
		衣食住の制限規定
		江野村勤勞の取りきめ
第四節	農民層の分解と地主制……………	405
	中谷村・六地藏村の場合	但馬最大の大地主・平尾家の成長
	平尾家家訓における理想的地主像	
第五節	山林の利用と山論……………	417
	御留山・村山・百姓山	入会山林の利用形態
		江野村入会山の慣行
	立石村ほうが谷の山論	江野・伊賀谷山論と平右衛門の遠島
		山論の発生の原因と時期
第六節	海猟と川猟……………	425
	食膳に供された蛋白質	漁村と漁場
		小島村の場合
		津居山村・瀬戸村・田結村の場合
	鯨猟	漁村の組織・漁法・猟師のおきて
		水産物加工と魚の販売
	城崎郡内の川猟	大磯村の鮭どう
		気多郡内の川猟
		うなわ・うわな
第五章	町方のくらし……………	451
第一節	名主……………	451
	五町名主と端町名主	名主のしごと
		名主の報酬

第二節	年中行事……………	460
	正月 狐狩 毛祭 七夕 盆 地藏盆 百万遍繰 八朔綱引	
第三節	祭礼……………	471
	御霊社祭礼 弁天宮祭礼 山王社祭礼 小田井社祭礼 女代社祭礼 その他の祭礼	
第四節	娯楽と芸能……………	478
	芝居 見せ物 相撲 能・狂言 浄瑠璃	
第五節	疫病と医療……………	489
	疫病 くすり 南条家伝「高山薬」 医師 種痘	
第六節	巷に生きる人びと……………	497
	目明かし 番人頭 自身番 座頭	
第七節	洪水……………	503
	文化十三年の洪水 嘉永三年の洪水	
第八節	火災……………	509
	文化十四年の大火 火元吟味 萱屋根禁止 「出火の節」の規定	
第九節	禁令さまさま……………	512
	儉約令 博奕禁止令 停止令 その他の禁令	
第十節	賞罰……………	517
	高齢者表彰 死罪 領分払い	

第六章 流通経済

第一節 交通と運輸

むかし道 渡しと橋 参勤交代の道 巡見使の旅 遊山の旅 伊能忠敬の測量巡国の旅

川舟争い 高瀬舟の運輸 川舟の分布と造船 舟賃の改定 海上舟運

第二節 米

米の収納 払米 米価 思惑買 石代

第三節 酒

酒株と酒造高 大黒屋伊兵衛一件 利酒会 株改めと制限令

町場酒造人と在方酒造人 酒の値段と酒切手 三国種

第四節 豆腐

豆腐 豆腐屋と豆腐値段 豆腐寸法改め

第五節 油

油仲間 油の値段 油師 種買

第六節 柳行李

行李の名称 行李の起源 行李製産の自然条件 宝曆期のお触書 柳行李の商品性

文化期の紛議 骨柳問屋の設立 製産と流通 天保期の改革

第七節 高屋焼と古出石焼

幕末期伊万里系地方磁器窯 但丹の磁器窯 高屋窯址発掘 高屋焼の文献 染付の逸品

古出石焼 壺屋焼 久美浜焼

第八節 鋳物師と瓦師

鋳物師と兵主神 鋳物師と日撫 近世の鋳物師 瓦師 土取り場争論 年切奉公人

煙害防止の定め

第九節 株仲間

運上銀 株仲間

第十節 札場

藩札 藩札盗人 元方(銀主) 札場転法 幣制紊乱 縮札 札場変義

新札発行 札場よりの借銀

第十一節 産物会所

設立 分離合体 産物針職 近江商人 産物納屋掛 産物糸方

第十二節 講

信仰的「講」 経済的「講」 恵義館

第七章 豊岡藩の試練

第一節 享保の減知

幕藩制の曲がり角・享保期 豊岡・京極藩の減知 上知村々の支配の推移

家臣団の縮少と禄高の削減 上知新領の貢租負担の増加 減知後の豊岡藩政

減知後の村々の動き 滝村庄屋・善次郎の越訴

613

613

606

602

590

587

580

	第二節	藩財政の窮乏と一揆の頻発……………	630
		貢租の変遷 宝曆七年の豊岡藩一揆 第六代藩主・高品の治世 出石下郷の明和の一揆	
		天明の飢饉と久美浜騒動 寛政の藩政改革と村方一揆 化政期の豊岡藩財政	
		文政五年の領内不穏 文政六年の豊岡・出石着不売出入り	
	第三節	町方変義……………	661
		化政期の商家経営 町方変義の発端 町方変義の史料 打ちこわしの状況	
		打ちこわされた富商たち 打ちこわしの参加者たち 文政の出石領下郷強訴	
		変義後の幣制紊乱	
	第八章	幕末期の動揺……………	691
	第一節	天保の藩政改革……………	691
		第八代藩主・高行の襲封 天保四年の天領一揆 天保の改革	
		出石藩の減知と天領の村々	
	第二節	天保の飢饉……………	708
		飢饉の惨状 豊岡藩の救護策 立野村お粥小屋 町方でのお救い	
	第三節	幕末の政情と豊岡藩……………	715
		海岸防備 幕末期の藩政 尊攘派の台頭 「生野義孝」と豊岡藩 戦時負担の増加	
		石代嘆願一件 山陰道鎮撫使入但 ええじゃないか踊り	
目次	第九章	江戸時代の宗教……………	749

第一節	近世寺院の出發……………	749
	中世寺院の崩壊 近世寺院の編成	
第二節	寺院の急増……………	755
	近世の寺檀關係と墓碑 本末制 真言宗と日蓮宗 浄土真宗 興正寺教線	
	惣道場と道場 曹洞宗 本末制と寺請制	
第三節	興国寺の建立……………	770
	建立期の修正 「城地改修」の意味 世代と寺歴 百拙と末寺 数奇の転変	
第四節	宗門改め……………	781
	キリシタン 宗門人別帳 神職と寺請 離檀の諸例	
第五節	小田井・山王兩社争論……………	787
	「先格」の尊重 強い序列意識 一〇〇年目の和融	
第六節	本末寺院間争論……………	791
	幕政の弛緩 養源寺系争論 莫大な訴訟経費 来迎寺系争論 福成寺系争論	
	光行寺系争論	
第七節	神仏習合……………	795
	習合四態 習合の習俗化 観音開扉 御霊信仰	
第八節	「庶民仏教」と石造遺物……………	800
	庶民仏教 念仏講と名号石 念仏講と浄土真宗 題目石と六十六部塔 六地藏	

	六地藏という地名	右とよおか左ゆしま	消えゆく文化財	二本立て仏教
第九節	遊行上人の回来	814
	遊行宗と遊行上人	上人回来	一空上人、豊岡に死す	遊行の俗化
第十節	本願寺上人下向	818
	「六条さん」	下向の趣意	光行寺で昼食
第十一節	お蔭参り	821
	お蔭参りと伊勢信仰	九十郎旅日記	施行
第十二節	神仏分離と廃仏棄釈	825
	本末制・寺請制の廃止	式社調査	市内の神社	仏教の復活
第十章	文化と教育	836
第一節	豊岡の歌人たち	836
	歌壇概説	保田佐世と町家の歌人	藩主一門と家中の歌人	都で名をなした前波黙軒
	南条鷺橋と後期の歌人
第二節	蝶夢門の俳人たち	854
	蝶夢と豊岡の俳壇	木卯	福井髭風と息・東皐	懐花庵社中の俳人たち
	失明の俳人・由利菊隠	藪内東走と木姿
第三節	漢詩を詠じた人たち	881
	福井謙斎	岸田丹山	阪本南溪	中田公国

第四節 郷土にゆかりの画家たち……………885

浮世絵師・豊春と戴斗 南画派の画家

第五節 民俗芸能と古い民謡……………891

法花寺万才 日吉と小田井の太神楽 雷神社の御田植祭 田結の六齋念仏

気比の祭文節 ヤチャ踊 松坂節 べろべろ節 六条さん(奈佐節)

京仙さん節(奈佐踊) 田植唄ほか

第六節 藩学と私学……………914

二つの心学講舎 含草舎 養浩舎 寺小屋の普及 藩学・稽古堂 武学・斎武寮

豊岡藩と池田草庵

第七節 市内の古庭園……………934

庭園概説 観正寺庭園 三木邸跡庭園 青山邸庭園 保田邸庭園

あとがき……………941

付録

図・表・写真一覧……………36

豊岡市史年表(江戸時代末まで)……………1